

〔全国縦断〕 キャリア教育 ～キャリア発達を支援する実践の追求～ 第47回

栃木県立富屋特別支援学校

「社会において自立的に生きる基礎を培う」

Keyword : 1. 自立 2. 自信と意欲 3. 信頼関係 4. 安心感

〔校長〕 中田 誠

〔児童生徒数〕 346名

〔職員数〕 163名

〔設置学部〕 小学部／中学部／高等部

〔障害種〕 知的障害

〔研究テーマ〕 自信と意欲を育てることにより持てる力を伸ばす指導



1 はじめに

本校は、養護学校の義務制が実施された昭和54年4月、栃木県の県央部にある宇都宮市に開校した知的障害のある児童生徒に対する教育を行う特別支援学校である。

初代校長の堀田長(ほった ひさし)先生が当時の教職員と共に汗を流して取り組まれた新しい学校の建設、その根幹に置かれた「いつも 前向きに あったかく」という職員信条は、その後、歴代の教職員に脈々と受け継がれている。

開校42年目の現在、研究的で温かい校風の中、教職員は児童生徒一人一人の学校卒業後の自立を見据え、小学部、中学部、高等部の各段階における自立とは何かを問いながら、12年間の教育の体系をより確かなものにするため、日々の実践に取り組んでいる。

2 自立とは何か

新学習指導要領の趣旨を踏まえ、本年度、新しい教育目標を設定した。「一人一人の障害の状態等に応じたきめ細かな教育を行い、自信と意欲を育てることにより持てる力を伸ばし、社会において自立的に生きていく基礎を培う」というものである。自分を信頼し、前向きに生きようとする心、すなわち自信と意欲が育てば、知識や技能、態度などは、必ず後からついてくる。

ところで、「自立的に生きていく」という時の「自立」とはどのようなものであろうか。

私たちは、障害の有無にかかわらず、日頃、家庭や地域、職場などの身近な社会の中で、自分の意思（自己決定）に基づき、互いに自分のできる範囲で役割を分担し、足りないところを助け合いながら生きている。

自立という概念は、自分一人で生活するというだけでなく、周りの人と助け合いながら生活するということまでも含めて捉える必要があり、自立＝社会参加と定義することもできる。

また、自立や社会参加は、一般には将来の姿として想定されることが多いが、見方を変えれば、家庭や学校、デイサービス事業所等における日々の生活の中に、現に存する姿でもある。

このように見ると、社会において自立的に生きていくことの中核にあるのは、自分と周りの人との間に、互いに助け合える信頼関係を築くことであると言えよう。

3 キャリア教育の本質

キャリア教育が叫ばれて久しい。進路指導の取組が既にある中で、キャリア教育が提唱された経緯と今日に至るまでの過程を大づかみするならば、初期の段階では、ニートやフリーター、早期離職などの社会的な問題への対応として、職場体験等を通じた勤労観・職業観の育成に軸足が置かれ、その後、多少の曲折を経て、本来のねらいである社会人・職業人として生きていくために必要な基盤となる能力や態度の育成に軸足が戻ってきたということであろう。

特別支援学校においては、従前から、児童生徒の卒業後の自立を見据え、学校の教育活動全体を通じて、小学部、中学部、高等部の発達段階を踏まえながら、コミュニケーションや人間関係、自己理解、自己決定などの、社会において自立的に生きていくために必要な幅広い能力や態度を育てる教育に取り組んできており、それはキャリア教育そのものであると言える。

4 信頼関係の構築

ここでは、社会において自立的に生きていくことの中核にある「人と人との信頼関係の構築」について、朝の体力づくりの場面の中から小さなエピソードを取り上げ、考えてみたい。

本校では、毎朝、中学部と高等部の全生徒が、1周400メートルの周回コースでランニングに励んでいる。一人で5キロメートル以上を走る生徒もいれば、教員と一緒に休みを入れながらゆっくりと歩く生徒もいる。私(校長)にとっては、生徒と一緒に走ることを通して触れ合いを深める大切な時間である。

コースの各所に教員が立ち、生徒一人一人に対して、「元気があっていいですね」「今日はいいペースですね」と笑顔で温かい言葉をかける。保健室の前を通過する生徒が、養護教諭から「Aさん、頑張ってる」との声援を受け、俄然スピードを上げて走り出す姿を見ると、思わず笑みがこぼれる。

私も、生徒に並走しながら、「Bさん、学校祭のクリスマスリースの販売、大きな声で頑張っていたね」など、その時々为学校行事等において生徒が自分なりに努力したことや工夫したことを認め、笑顔で温かいまなざしを送る。また、毎朝、周回コースの起点にポータブルの放送機器を設置し、BGMを流してくれる生徒会の運動委員会の生徒たちには、笑顔で「いつもありがとう」と感謝の言葉を伝える。

そうした教員や校長の働きかけに対して、多くの生徒が「はい、元気です」「ありがとうございます」と明るく元気に返事をするこ

とができる。すると教員らは「いい返事ですね」「笑顔がいいですね」と生徒の良いところを積極的に認め、思いやりのある言葉を返す。

ある日、シューズを履き替えて走り出した時に、「校長先生、昨日、内定の連絡をいただきました！」と満面の笑みで報告を受けたことがある。その時は本当に嬉しかった。採用の内定はもちろんだが、それを報告する生徒の言葉や表情に乗せて届けられた「朝一番に、内定の喜びを伝えたい」という思いに心が動かされる。そこに、確かな心のつながり、信頼を実感する。

一方で、教員らの働きかけに対して、即時的に応答することの難しい生徒もいる。そのような生徒には、過剰な刺激とならないように配慮して、「Cさん、おはようございます」と声をかけ、応答がなくても軽く手を上げ、笑顔で温かいまなざしを重ねる。

そのような働きかけを続けるうちに、生徒は、教員らの顔をわずかに振り返ったり、嬉し恥ずかし表情を見せたりするようになる。普段は、促しを受けてもスムーズに挨拶をすることの少ない生徒が、遠くから私を見つけて、「お～よ～(おはよう)」と大きな声で挨拶をしてくれた時には、小躍りするほど嬉しかった。ここにも、信頼の確かな芽生えを見ることができる。

5 おわりに

自分を信じて見守ってくれる人がいつもそばにいてくれるという安心感、これを社会に向かう力の源として、児童生徒は、人と触れ合うことを楽しんだり、新しいことに積極的に挑戦したり、難しいことにも粘り強く対処したりすることができるようになっていく。

児童生徒が、日々の生活の中で安心感に包まれながら、周りの人との信頼関係を築き、助け合って生きることを学んでいけるよう、教職員一同心を合わせて、「笑顔」と「温かい言葉」を大切にしながら、児童生徒の「自立」を見守っていききたい。

(文責：中田 誠)